花嫁を「買う」

深田 淳太郎（ふかだ じゅんたろう）
一橋大学大学院社会学研究科博士課程

パプアニューギニア、ニューブリテン島東端の町ラバウル。赤道のすぐ南に位置するこの町に、真上から太陽が照りつけてくる一〇月のある日の午後のこと。わたしは隣人の家の庭にある大きなマンゴーの木の下でビンロウをかじりながら、ヴァルククルがはじまるのを待っていた。町の近郊に暮らしているトーライ族のことばでヴァルククルとは「買う儀礼」を意味する。彼らの貝殻のお金（貝貨）の使い方について調べていたわたしは、近所でこの儀礼がおこなわれると聞いて駆けつけたのである。

ヴァルククルのときに買うのはヴァヴィナ、すなわち女性である。何かいかがわしく聞こえるかもしれないが、そういうことではない。彼らのことばでは、結婚に際してムコ側からヨメ側の親族に結納金を支払うことを「女性を買う」と表現するのだ。

かつては女性がまだ幼いうちに相手の男性の親が「手付け金」として貝貨を支払い、当人の意志に関係なく将来の結婚を決めてしまうこともあったという。しかし現在では、ほとんどの場合で結婚相手は当人が見つけてくるものであり、個々人の恋愛事情にまかされている。わたしが見に来たこの日のカップルも「ダンスパーティ」が出会いの場であったという。

閉じ込められている主役

ヴァルククルは午後二時からはじまると聞かされていたが、花嫁のオジであるこの家の主人の親族たちがぽつぽつと集まりはじめたのは午後三時を過ぎてからだった。彼らは各々バナナや冷凍の羊肉、魚やコンビーフの缶詰など、ヨメ側からムコ側に贈るための食料を携えてきていた。必要なモノがそろい、必要な人が集まり、だんだんと会場の準備が整っていく。そんななかで気にかかるのは、本日の主役であるはずの花嫁の居場所だ。彼女は会場に面した小屋のなかにいる。そして小屋の扉には外側から錠がかけられている。見ようによっては小屋のなかに閉じ込められているようでもある。

ようやくムコ側の親族集団が到着したのは、日もかなり傾いてきてからだった。二台のトラックに総勢二〇人ほどの一団を率いるのは花婿のオジ。結婚する当の花婿の姿は見当たらない。花婿は村で待っているものなのだという。

早くしないと日も暮れる。パンダヌスの葉で編まれたマットを挟んでヨメ側とムコ側が正対して座り、さっそく「買う儀礼」がはじまった。牧師のお祈り、村長の挨拶、役所への謝礼の支払いとスムーズに手順が進められていき、ついに本日のメインイベントである貝貨の支払いがおこなわれる。

花婿のオジはバスケットのなかから貝貨を取り出して確認するように周囲に見せ、マットの上に一束ずつ並べていく。一、二、三…最終的に一五束の貝貨がマットの上に並べられ、さらにその脇には貝殻がギッシリ詰まった瓶が六本置かれる。貝貨は一〇本で一束にされているので一五束で一五〇本分、また瓶一本の貝殻は貝貨五本分として換算されるので瓶六本で三〇本分。あわせて一八〇本分の貝貨が公衆の面前でヨメ側に支払われた。ムコ側からの支払いが済むと、今度は花嫁のオジが立ち上がって手短な演説をおこない、その後でバスケットから二束ほどの貝貨を取り出してムコ側の親族が座っている前に置いた。

貝貨のレシート

貝貨の支払いが済むと、すぐに会場に面した小屋の錠が開けられる。オジに促されてなかから出てきた花嫁はハンカチを噛みしめ号泣していた。別れを惜しむ間もなく、花嫁はムコ側のトラックの荷台に載せられる。トラックは大量の食料と花嫁を一緒に積み込んで花婿の待つ山の上の村へと帰っていった。到着から帰っていくまではわずかに二〇分ほど。それまで三時間以上も待っていたのが嘘のように、あっさりと「買う儀礼」は終わった。

簡素であっただけに、この儀礼で何がおこなわれたのかは明確である。ムコ側が貝貨を支払って、花嫁を手に入れる。まさに「買う儀礼」の名のとおりのことがおこなわれたのだ。貝貨がきちんと数えて支払われ、その対価として小屋のなかに閉じ込められていた花嫁が連れられていく場面が、わたしの目には商品の売買のように見えてしかたがなかった。

日も暮れて家に帰る途中、ひとつだけ気にかかっていたことを一緒に歩いていた友人にたずねてみた。「最後に花嫁のオジがムコ側に貝貨を渡してたよね。あれはなんだったの？」

「あれは貝貨一八本だ。一八〇本を婚資としてもらったからな。その一〇分の一を支払ったんだよ。まあレシートみたいなもんだな。」

そうか、あれはレシートだったのか。やっぱり花嫁は「買われた」のだ。

純白のウェディングドレス

それから二、三ヵ月が過ぎたころ。いつものように村を歩き回っていると、あの日の花嫁が夫を連れて村に戻ってきているところに出くわした。村の教会で牧師の祝福を受けるのだという。純白のウェディングドレスを身に纏った彼女は、親族や友人に囲まれ、自分が選んだ人生の伴侶と寄り添って、あの日の号泣など無かったかのように幸せそうに笑っていた。

わたしはその笑顔を見てなんとなく胸をなでおろしたあと、ポケットから取り出したフィールドノートに「買うってなんだ？」と大きく書き付けた。その答えはまだわからない。

マットの上に一束ずつ貝貨が置かれていく

小屋の錠が外され、なかから花嫁が出てくる。父親（赤いシャツの男性）も涙をこらえている

村の教会に向かうところ。ウェディングドレスは借りてきたものだという

花嫁はバナナなどの食料と一緒にトラックの荷台に載せられた